

GnRH アンタゴニストとして Relugolix を用いた採卵周期の最終成熟誘導法の検討

小宮慎之介^{1,2} 浅井淑子¹ 井上朋子¹ 岡田英孝² 森本義晴¹

1) HORAC グランフロント大阪クリニック、2) 関西医科大学大学院産科婦人科学講座

当院では、臨床研究として GnRH アンタゴニストとして Relugolix を用いた採卵周期を限定的に行っているが、buserelin acetate を用いた最終成熟誘導法を選択した症例の獲得胚数が少ないという臨床上の印象から、最終成熟誘導法 (Choriogonadotropin alpha、buserelin 点鼻、double boost (Choriogonadotropin + buserelin 点鼻))による採卵数、成熟 (M II)卵数、分割期胚数を比較検討した。当院で 2019 年 1 月から 2020 年 8 月までの期間に実施された採卵周期のうち、Antagonist 法 1721 周期中、254 周期で Relugolix を使用した。結果、Relugolix の有無によらず、採卵数は最終成熟誘導法の影響を受けなかったが、成熟 (M II)卵数および分割期胚数は Relugolix 使用群で buserelin acetate による最終成熟誘導法を選択した群で有意に減少した (それぞれ $p=0.04$ 、 0.01)。以上より、Relugolix 使用周期の最終成熟誘導は、可能な限り buserelin 点鼻を避けるべきであることが示唆された。